

日本語を使って、地域に学び、貢献する試み

LEARNING THROUGH TEACHING:
COMMUNITY ENGAGEMENT AND REFLECTION

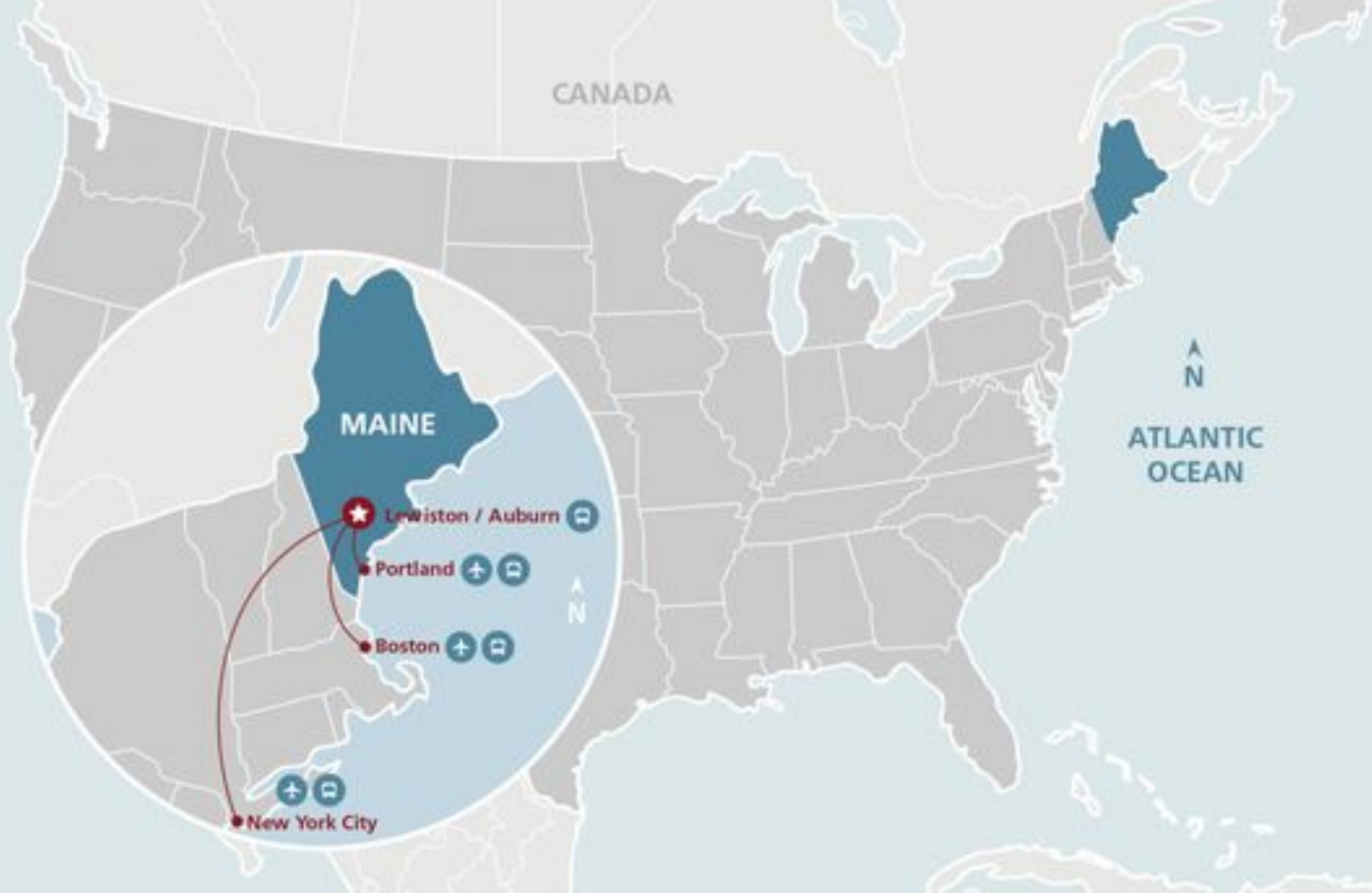
此枝恵子(ベイツ大学)

kkonoeda@bates.edu

PACIFIC
OCEAN

CANADA

ATLANTIC
OCEAN



MAINE

Lewiston / Auburn

Portland

Boston

New York City

発表の流れ

1. 大学の「外国語」教室と地域社会の関わり
2. 地域社会の特性
3. 実践の概要・流れ
4. 1年目の学生へのインタビュー、2年間の教員の観察から
5. まとめ、今後への課題



大学の「外国語」教室と地域社会の関わり

- 地域社会＝実践的・協働的な学びの場？
- CBSL (Community-Based Service-Learning)
 - 学生の学びを意図的に促し、地域のニーズに応える
 - 内省(reflective practice)と互惠(reciprocity)
 - 大学と地域の間で倫理的で持続可能な関わりを目指す
- その言語を話すコミュニティに関わる
 - 留学先、もしくはESL、スペイン語
 - Hanaoka (2016) 北米太平洋地域、エスノグラフィー・SL、帰属感
 - Fujie (2019) 中西部、日本人児童の現地校学習支援、関係・動機づけ

その言語の話者・学習者が近隣にいない

- Grim (2010) 小学校で外国語を教える予算がない
 - フランス語を履修する大学生が、近隣の幼稚園と小学校でフランス語とフランス語圏の文化を教える
 - 自らの学習動機、職業関心、地域における役割
- Grim (2017) モデルの紹介、日本語を含む他言語に拡大
- Thomas (2017) 休暇中、大学で地域の子どものための外国語キャンプ
- Aridome (2015) 「日本語教え隊」ボランティア、放課後プログラムの小学生に日本語を教える、リーダーシップ・自信
- Sazawa (2018) 日本語中級コースの一環、小中学校・高齢者施設訪問、日本語・日本文化を紹介、振り返りの話し合いと作文

社会参加をめざす日本語教育

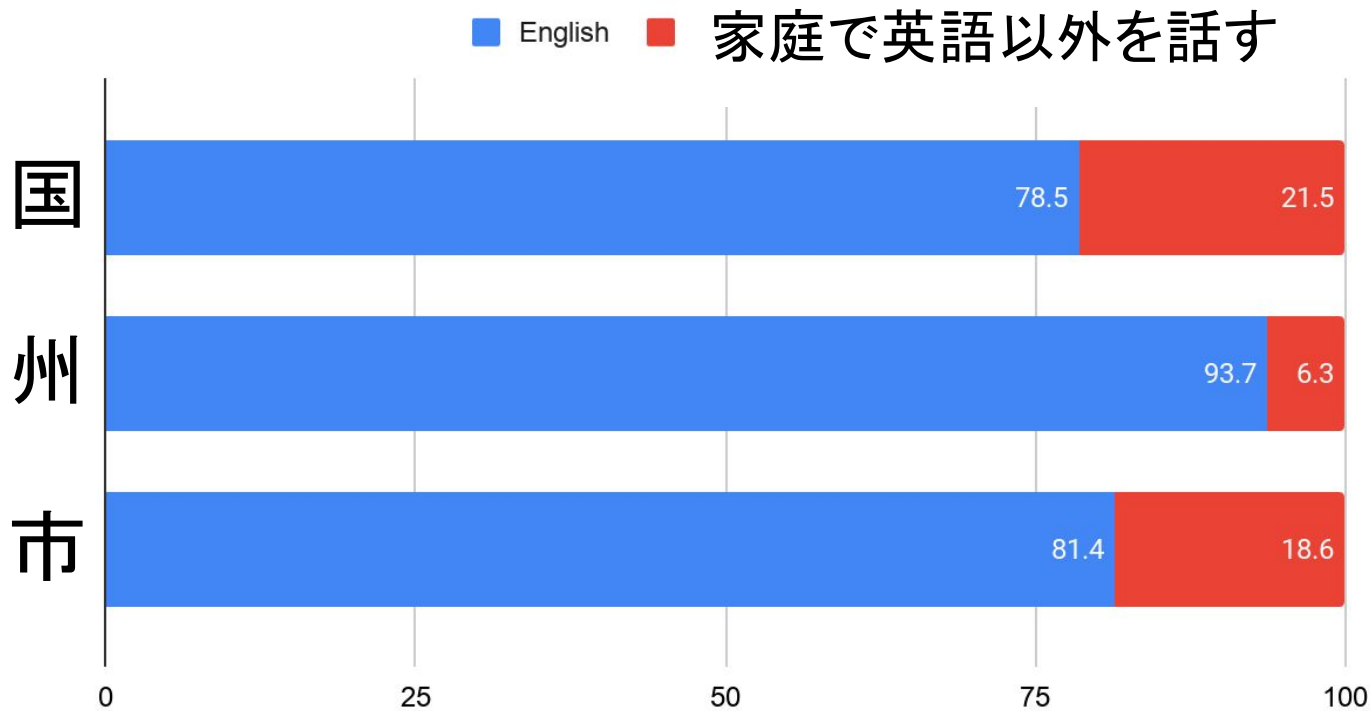
「学んでいる日本語を用いて積極的に社会、自分の所属している／所属したいコミュニティと関わり、その過程に起こるさまざまな問題を解決しながら、自己実現をはかっていくこと」(西俣他, 2016, iii)

- 学生 = 日本語の「学習者」+「使い手」
- 主体的に計画を立て、社会参加を実践し、振り返る機会



地域社会と言語・文化の多様性

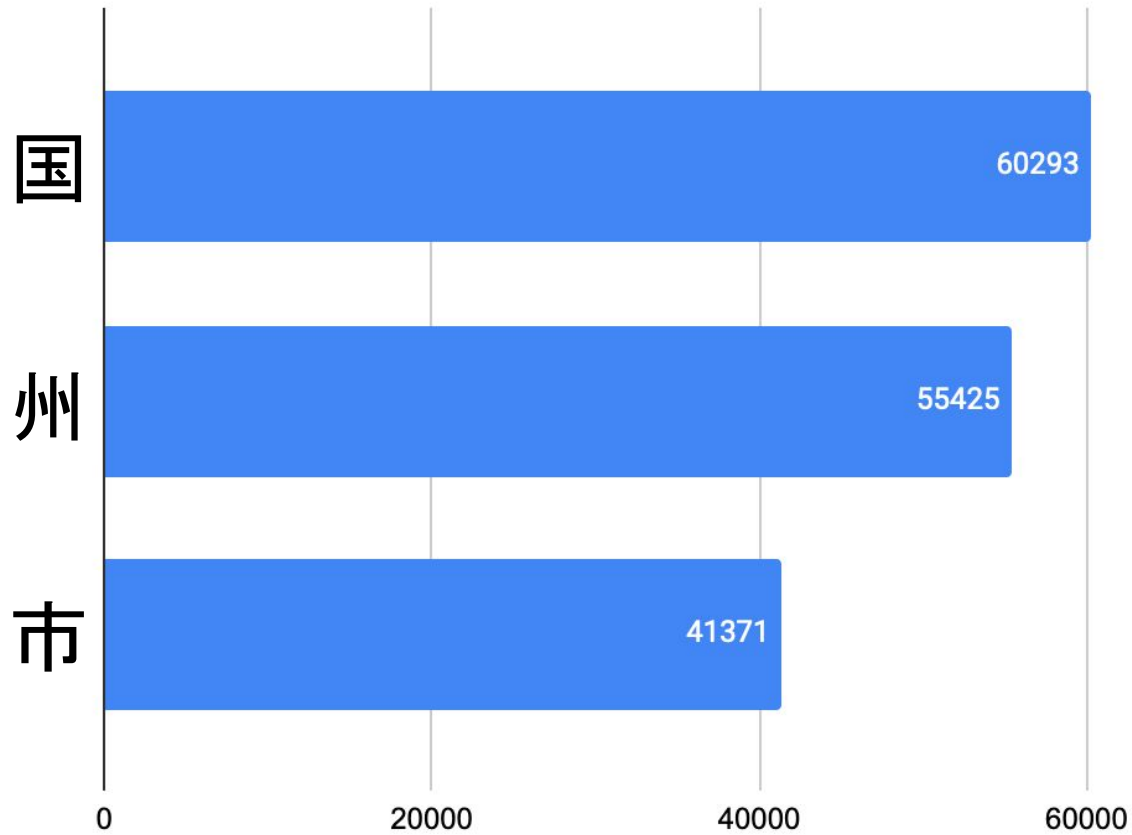
Language Spoken at Home



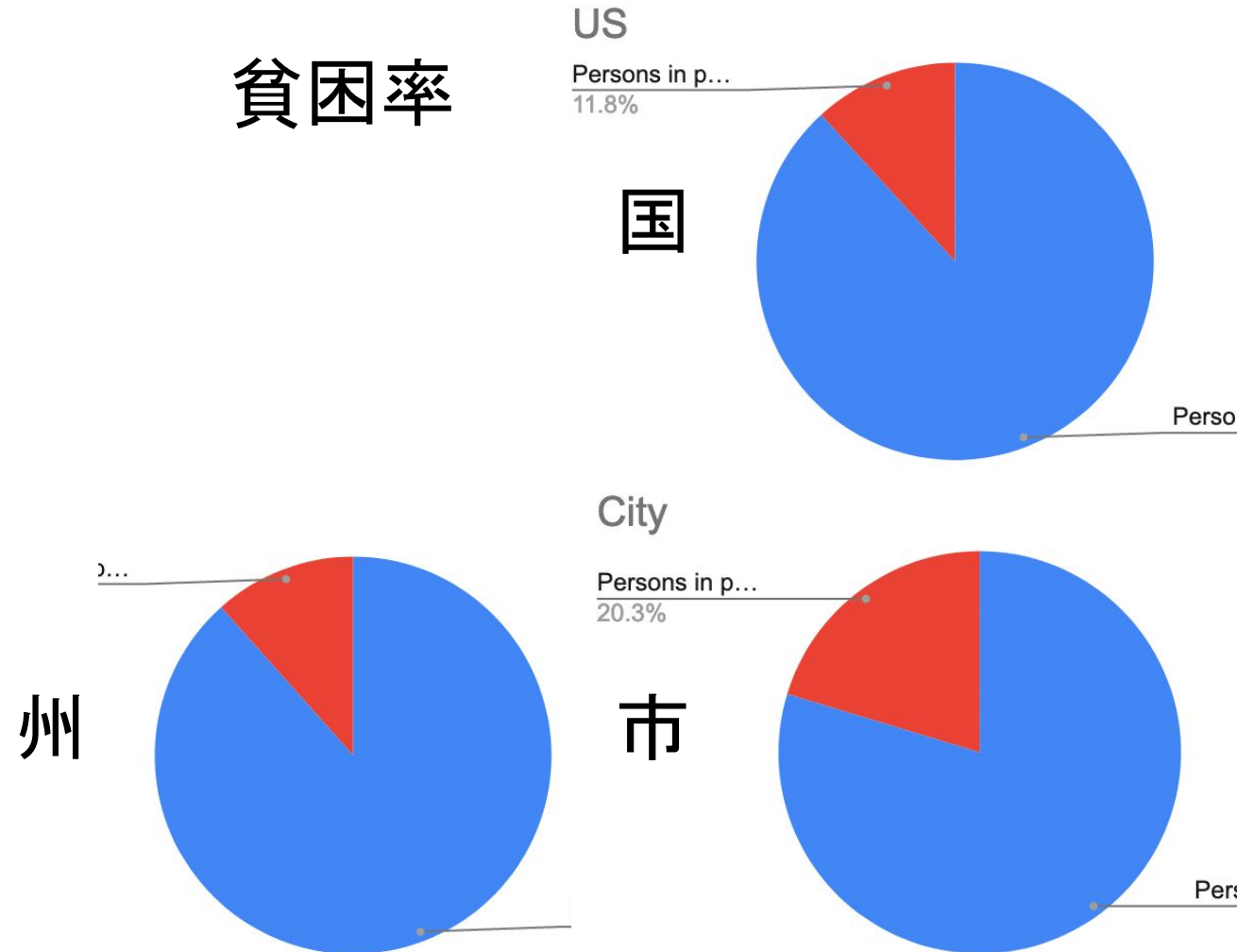
- アメリカ合衆国の家庭で話される言語は少なくとも350
- 言語: メイン州では6.3%、大学の位置する市では18.6%が家庭で英語以外の言語を話す、アメリカ合衆国全体では21.5%
- 人種: メイン州ではヨーロッパ系が94.6%、この市では87%でアフリカ系が増加中5.2%
- カナダのフランス語圏、ソマリア・バンツー難民、アフリカから

地域社会の特性

世帯収入の中間値



貧困率



大学のサポート

- Center for Community Partnerships
- コースの一環としてカリキュラムに統合し、振り返りを通して意図的な学びの機会とすることを推奨
- 日本語コミュニティーがない
- 教育のニーズが高い
- 若者は日本文化に関心がある
- 小中学校の放課後プログラムに活躍の場がある



実践の概要

- 日本語3年目の2学期目（中級後期）
- 2019年：7名、2020年：4名
- コースのテーマの一つ「言葉を学ぶことにはどんな意味があるのだろうか」
 - 前半（1-2月上旬）準備
 - 後半（2月下旬-3月）5週間のフィールドワーク
 - 振り返りの記録・レポートと発表
- 代替活動：文献を週に1つ読んで要約をまとめてレポートを書く

振り返り記録 (Google Site, テンプレート)

日本語302 プロジェクト・ポート
フォリオ

Search this site

私のプロジェクトについて

1週目

2週目

3週目

4週目

5週目

レポート

レポート

作文3のFinal DraftをここにCopy & Pasteするか、Insert Google Docしてください。

で考えたことを書きます。

放課後プログラム

- 小中学校の校舎を借用、午後3-5時(4-6時)の中に、宿題の時間、プロジェクト学習の時間、選択Enrichment(体操・演劇など)
- 2月下旬～3月末:週に1回(1時間)、5週間
- 大学生が教えたい学年と曜日の都合を合わせて振り分け
 - 2019年は小学校(3-6年生)に3名、中学校(7-8年生)に2名
 - 2020年は小学校(3-6年生)に2名、中学校(7-8年生)に2名
- 児童生徒:2019年は10-15名程度、2020年は3-5名が中心
- 2020年は3月中旬から予定変更

一年目の学び(グループ・インタビューから)

- 2019年2-3月に参加した学生5人のうち、卒業した学生を除いた4人に2019年10月にグループ・インタビュー

- 教室外で日本語を使う機会ができた
- 日本語に興味を持つ小中学生に出会えた
- 教え方を学んだ



- 週1回、5週間の限界
- 達成できる現実的な目標設定
- プログラムについてよく知らない
- 自分たちの立ち位置？



地域・プログラムの特性を知ること

- 準備期間の読み物を地域に密着したものに
- 2019: America's Languages (Rivers & Brecht, 2018)
- 2020: 地域の新聞から言語に関する新聞記事

- プログラムの形式、目的、特性を説明
- カフェテリアから入る理由
- ボランティアを受け入れる柔軟なプログラム
- 参加者の柔軟性も求められる(欠席児童、学校の予定変更など)

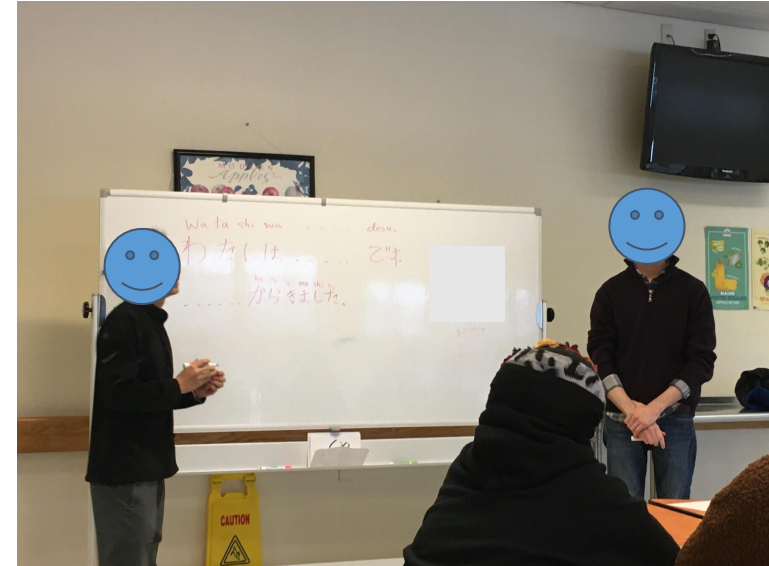


少人数の中学生と関係を築けたこと

- 中学校

2019年: 10-15名、ヨーロッパ系約7割

2020年: 3-4名 + α 、全員がアフリカ系女子生徒



- 一日目の自己紹介で「私の言語」: 1.7? → 2

- 少人数のクラス: 4名の名簿? → 関係を築く

学生の主体性、教員の役割

- 「自分の授業」という実感
 - 学生チームで案を考えてから教員とミーティング
 - 教員は行ける限り同行するが補佐しかしない
 - 何をどうやって教えたいか、上手く行ったか、臨機応変の対応
 - 2020年中学校チーム「ひらがなを教えたい」
- リソースの提供
 - Grim (2017)の授業案テンプレート、トピック案一覧など
- 今後の課題: プログラムスタッフとのやりとりに学生を巻き込む

まとめ

- 地域について知ること
- 定期的な振り返りを通してコースの学びの一環に
- プログラム、教員、学生、生徒の間関係づくり
- はじめの一步
 - 大学内のサポート
 - 自分で地域社会に一步を踏み出してみる
 - 小さく始める、予想外の気づきを大切に
- 地域について学ぶ→地域とともに学ぶ (Lee, Curtis, & Curran, 2017)

参考文献

- Aridome, H. (2015). Teaching Japanese: When the student becomes the teacher. 29th Annual Conference, The Japanese Language Teachers Association of the Northeastern Region. Tufts University, MA. August 22.
- Census Bureau. (2015, November) Census Bureau reports at least 350 languages spoken in U.S. homes. *Press Release CB15-185*. <https://www.census.gov/newsroom/press-releases/2015/cb15-185.html>
- Fujie, N. (2019). *The impact of participation in a service-learning program on university students' motivation for learning Japanese*. A MA thesis submitted to the faculty of Purdue University.
- Grim, F. (2010). Giving authentic opportunities to second language learners: A look at a French service-learning project. *Foreign Language Annals*, 43 (4), 605-623.
- Grim, F. (2017). Experiential learning for L2 students: Steps toward a French service-learning program in the community. In M. Bloom & C. Gascoigne (Eds.) *Creating experiential learning opportunities for language learners: Acting locally while thinking globally* (pp. 72-83). Multilingual Matters.
- Hanaoka, V. E. W. (2016). Using community-based instruction to promote language affiliation: Findings from Japanese language learners. *Journal of the National Council of Less Commonly Taught Languages*, 20, 49-72.
- Lee, C. P., Curtis, J. H., Curran, M. E. (2017). Shaping the vision for service-learning in language education. *Foreign Language Annals*, 51, 169-184.
- Sezawa, C. (2018). Implementing Service-Learning in World Language Classrooms. 2018 Annual Convention and World Languages Expo, American Council on the Teaching of Foreign Languages. New Orleans, LA. November 17.
- Thomas, J. (2017). Language camps: By teaching we learn. In M. Bloom & C. Gascoigne (Eds.) *Creating experiential learning opportunities for language learners: Acting locally while thinking globally* (pp. 242-257). Multilingual Matters.
- 西俣（深井）美由紀, 熊谷由理, 佐藤慎二, 此枝恵子. (2016). 日本語で社会とつながろう！社会参加を目指す日本語教育の活動集
ココ出版